

研究者の論理と実践

京都大学物理第一教室

生物物理自主研究グループ^{＊)}

(9 月 2 4 日 受 理)

○ 今、大学は変革されようとしているのだろうか。確かに、至る所に改革案は、みち溢れ、自主解決が叫ばれている。だが一体、我々は何を変えようとしているのだろうか。大学の変革は、何も今に始った事ではない。しかし、大学が今日のような根源的批判に晒された事は、かつてなかった事である。それは、とりもなおさず、我々研究者に対する厳しい批判でもあるのである。おそらく、大学は今後、数年に涉って激しい変革期を経験するだろう。しかし変革を担う主要な主体である研究者自身が、先ず、変革の客体である事なしに、大学の変革はありえない。研究者としての存在の基盤そのものが告発されている今、研究者自身が、一個の実践主体として如何に生きるのかが問われているのである。自らの変革は、我々自身の変革的实践として捉えられねばならない。その中にしか、大学変革への我々の係わり合いはありえないのである。

＊) 生物物理自主研究グループとは、今年4月に発足した、京大物理第一教室の生物物理研究者を志す院生の、自主的研究集団で、単に学問上の研究にとどまらず、根源的に現在の学問を問い直す姿勢から、一貫して現状に対して問題提起をして来た。

発足の動機は、従来の生物物理の2つのユニット（従来の講座制と本質的に変わりはないが、講座制においては助教授が教授に従属しているのに対し、ユニット制においては独立している。）の内の一つのユニットの教授の転出をめぐっての「内紛」的感じであったが、そこからより出発して、制度へ、学問へ、現状へと考えをつきつめてゆく過程において、従来の矮小な次元をのりこえ、現代の学問的情况への告発を行なって来ている。

- 自ら研究者を選び、又日夜研究に没頭する内面的動機を聞かれるならば、我々は、一体何と答えるだろうか。ある人々は、人類にとっての科学の＜意味＞を、様々に語るかもしれない。或は、自らの研究の社会的・歴史的な＜意味＞や＜価値＞を語るかもしれない。或は、自然との格闘におけるある種の精神的解放感でもって、自分にとっての研究活動の＜意味＞を、私小説風に語るかもしれない。或は又、賃労働としての自己の研究活動の＜価値＞を語るかもしれない。そして多くの研究者は、ただ「物理が好きだから」と答えるだろう。しかしながら、いずれにしても我々の内にあった科学と、その体现者である科学者像が、我々を、研究者という存在に導き、又導こうとしているものであるに違いない。（勿論、現代の教育システムにおいて、脱落的回避が、主体的な自己の選択よりも、より自らの存在を決定してしまいがちなのではあるが。）ところで、この我々の内にあった科学や科学者像は、必ずしも歴史的・社会的存在として捉えられていた訳ではない。客観的真理といった観念が、何か普遍的・超越的価値として、自然科学につきまとい、我々を捉えていたという事を、全く否定しきる事は出来るだろうか。現代科学の急速な発展が、人間とその環境にもたらした目ざましい変化は、あたかも一個の＜人間＞としての全体性を、託すことの出来るような何らかのイデオロギーを、現代科学に付与するに十分であったし、又、このようなイデオロギー性から、誰しも自由があった訳ではない。そして、そのようなものとは無縁に、我々が研究者の道を選んで来たのではないという事は、確かであろう。そして実際、研究実践にたずさわるようになったからといっても、このようなイデオロギー性から解き放されるという保証は、必ずしもないのである。研究活動にたずさわる研究者は、その研究過程を通じて、何よりも研究労働者としての自己を実感する。科学者が、賃労働者としてしか存在しえない今日において、自己を、生産労働＝論文作製をせずには、明日の生活を再生産することの出来ない一個の労働者だと規定する事は、極めて現実的である。しかしながら、それだけでは、決して説明しきれない論文やデータに対する小所有者意識をもっているのではなかろうか。労働者としての実感にも拘らず、研究労働の内発的動機の、大きな部分を、知的興味や名誉への渴望が占めている事は確かである。しかし、それ自体何ら否定されるべきでな

いこのような研究動機が、一個の人間の全体性、欲求の体系の中で、いかなる意味を持つのかという事が省りみられる時、研究者は、えてして、社会的存在としての自己の存在を、次のように正当づけるのではなからうか。即ち、「自分は人類の歴史の中で、連綿と自然の神秘を解き明かして来た伝統的な自然探求者、自然哲学者の列に運なり、又、自分にはその<資格>があるのだ。」と。このような意識は、つまるところ、社会的・歴史的実践としての科学という認識の欠落と、科学にまつわる客観性とか、普遍性とかいったものに対する観念的・絶対的価値観が、研究実践に対する<意味>づけにおいて、研究者の中から容易に抜け切らない所から生れるのであろう。その結果、研究者は、自己の専門領域に閉じこもり、社会的に見ざる、言わざる、聞かざる的な人間として存在し、研究者という自己の存在が、社会的に自立し、あらゆる社会集団から独立したものと思い込む社会的ユートピアに陥いるのである。研究者が、科学に対する観念論に酔い痴れている限り、研究者という自らの存在と自らの研究を、社会関係の中に対象化し、その中に変革の客体としての自己をみいだす契機は存在しない。結局、「研究それ自体の意味」や「科学のための科学」から一步も出られないのである。「人間なくして宇宙の實在に何の意味があるのか。」「すべての価値の創造者である人間の活動をはなれて、<客観性>にどんな意味があるのか。」というグラムシの言葉は、文字通りに理解されねばならない。自然と人間を切り離すことは、無意味な抽象にすぎないのである。よし、それが研究労働における大いなる慰めであったとしても。

- 研究者は社会において、どのような存在なのか。勿論それは、研究者を、その「職員」とする社会構造によって規定されており、一般的に精神労働をもって研究者を規定しきる事は出来ない。我々の存在を社会の中に位置づけるものは、研究という知的活動の中に求められるだけでは十分ではなく、そのような知的活動と、その体现者である研究者が、社会の諸関係の総体の中で置かれている諸関係の体系の中に求められる時、始めて明らかになるのである。研究一般、研究者一般などというものはなく、歴史的・社会的時点における研究と研究者こそ、我々が何者であるのかを知るために、対象化しな

ければならないものなのである。研究は、歴史的な一定の条件、一定の社会的諸関係における研究でしかないのである。このことを認識しない限り、研究者が、いかなる社会集団の「手代」であり、又、いかなる社会集団に「敵対」しているのかは、理解できないのである。

- 我々の研究は、必ずしも直接には社会化されず、普遍的情報としての自由な流通性をもっている。しかし、我々の研究は、必然的に人間の物質生活に組み込まれ、不可避免的に自然と人間の関係を変えて行く。その際、我々の研究は、社会の全構造と研究者を、その「職員」とする上部諸構造の総体によって「媒介」されざるを得ない。我々の研究の＜意味＞は、この「媒介」を通してしか＜意味＞たりえないのである。そして、直接的には、政府の科学政策が、社会の全構造の集約的な表現として、「媒介」の一機能を果たしているのである。科学の中で、我々の研究が、一定の＜意味＞と＜価値＞を持つのは、このような「媒介」を経てなのである。客観的真理・研究者の自立への幻想は、研究者に様々な＜私にとっての＞科学の＜意味＞をつぶやかせるかもしれないが、ナパーム弾で死に行くベトナムの子供にとって研究者である我々とは、そして我々の研究とは何であるのかという自問の前に、はかなくけし飛んでしまわざるを得ないのである。
- このようにして研究者が、自らの研究実践とは切離された所で、科学の＜意味＞を問い直さざるを得ないという事の中に、科学者の疎外を見る事が出来る。研究者が自己の研究の＜意味＞と＜価値＞を自らの手で実践する事は最早不可能なのだろうか。人類の物質生活の発展は、不可避免的に、国家による科学の支持と組織をもたらして来た。16・17世紀のフランシス・ベーコンは「科学は、国民の役に立つものであるから、国家は、科学を支持し、組織しなければならない。」と述べている。自然科学が形而上学と訣別しきれていなかった当時において自然と人間についての省察としてあった自然哲学を、有用性と公衆への関心のもとに抱えたこの見解は、極めて漸新なものであったそうである。しかし、ベーコンがこのような意見を述べようと述べまいと必然的に科学は、国家によって支持され、組織されて来たのである。

そしてその支持のされ方と、組織のされ方は、その国家社会の構造によるものである事は当然のことである。現在においては、科学の支持と組織化は、国家の重要な行政の一つとなっているのである。総資本を代表する政府は、資本の論理の必然的な要請でもって、合理化・近代化を進め、科学研究体制の整備、研究者の階層系列化を、今後より合理的・近代的に進めるであろう。その中で、我々は、いかなる研究者として生きるのが問われ、又、いかにして自らの研究の＜意味＞と＜価値＞を追求していくのが問われているのである。このことは、先ず、自らの存在そのものの問題として捉えられねばならないのである。

- 科学政策において研究者の手に、一体何が残されているのだろうか。一般的には、自然の論理のみと言う事が出来るだろう。しかし、この自然の論理も又、歴史的・社会的に規定され、決して社会構造と無関係なものではない。研究投資の操作によって研究の対象すら、研究者の手から奪うことが出来るのである。＜科学の正しい発展＞を唱える事によって、科学の不均衡発展を批判することにおいてかろうじて研究者の論理が買われて来たのであろうか。自然の論理は、いかなる批判的武器でありえるのかは、今一度問い直されねばならない。様々なレベルでの研究者の自治は、結局、為政者の側から見れば、極めて合理的なものであった。「研究の発展」が研究者の唯一の行動原理であるなら、そこに生れる自治は、何ら批判的機能は果しえず、科学政策の合理的代行としての機能のみ果していたのではなかろうか。研究それ自体の自己目的化、研究者の意識における没価値的・研究至上主義は、何らそれ自体、批判的实践とは、なりえない研究活動そのものに、一切の研究者の論理を託してしまう事に他ならない。研究者の自治を担う各々の研究主体が、科学的認識の主体である「観測的・没価値の仮構的自我」でもって、「研究者」を生き、あくまで「研究者」としての自己規定に固執するなら、業績は至上命令であり、そこからは、決して、科学政策への十分な批判的対決など出来はしないのである。研究者の自治が、十分な闘いとしては存在せず、自らの研究の＜意味＞や＜価値＞を自らの手で実践し、追求して行くことは、出来るはずもなく、又、科学を、我々の手にとりもどす事は出来ないのでは

る。我々にとっての問題は研究室の入口に立って、研究をやるか、或いは反戦デモに出かけるかといった問題ではなく、日常的研究実践において変革の主体としての研究者を如何に組織し、研究の場においていかなる批判的実践を行なうのかという問題を立てねばならないのである。それは、何よりも我々の手から科学が離れ、研究者のあずかり知らぬ所で一発三億人の殺リク兵器が存在しているのだという状況は、科学体制の底辺を支える研究室における研究・教育過程の中に貫かれ、又、その中に基礎を持ち、現在の研究者の状況そのものが、その中で、再生産されているからなのである。従って、そのような研究・教育の現場において、その事をあはき出し、変革的实践によって研究・教育にまつわるイデオロギー的幻想を打破ることなしに、研究者の存在条件を存在様式を克服することは出来ないのである。

- 研究者が、自らの研究を自ら掌握できないという状況はすでに研究室の中で現われて来る。それは端的には講座制という研究者間の身分秩序を通して生まれるのであるが、決してそれは、制度的秩序によってだけでは説明できない。研究者社会に状況に規定された研究・教育過程における実践主体間の緊張関係の欠如を通して表われて来るのである。京大や名大ではいち早く物理教室において講座制の打破がなされ、研究員制度がとられて来た。それは院生にも研究のための物質的基礎を与え、研究・教育体制の組織原理自体を変えるものとして把える事が出来る。しかし例えば京大では最近、「今なお、講座制の亡霊が徘徊するのは何故か」という事が問題にされ始めているのである。こういった問は、決して制度に向けられるだけでは何ら答えは出て来るはずもなく、先ず一個の実践主体たる個々の研究者自身に向けられねばならないのである。そして個々の研究者が、自立的・主体的研究者へと自己を変革しないかぎり、研究・教育過程における講座制の亡霊はいつまでも消え去らないのである。しかしながら自立的・主体的研究者を無媒介的に保持しえるものではない。教育一被教育における相互変換的緊張関係を日常的研究実践において、研究・教育過程を媒介にして保持され続ける事によってしか、一個の批判の主体、変革の主体として自らを保持しえないのである。それは必然的に研究者相互間の公開性と相互批判と共に、研究・教育過程の自己管

理や自己組織の形成をもたらすものである。このような自己統治の過程を通しての主体形成・主体の変革を抜きに教室運営への学生参加は語られないし、又、このような研究・教育過程の自己統治を基礎にした自治の積重ねと、変革主体の全国的な連帯なしには研究室の自治は、闘う自治とはなりえないし、科学体制への実践的批判もなしえないのである。研究者社会の状況が、そこにおける研究・教育過程を規定しつつある我々の研究の場において、そして何よりも我々の労働の場である研究室において、実践によって保持された研究主体間の緊張関係が欠如している限り、一切の研究者としての主体的な自己形成はあり得ないのである。又、それなしには、およそ自らの研究の＜意味＞など開示できないのである。

- 我々は、自己の研究者としての形成の過程において、正に自ら成らんとする研究者という存在を止揚してゆかねばならないのである。そしてこれは、不断の科学の体制化として機能する大学院という研究・教育実践の場における、一切の管理と支配を自らの手で打破ることなしには語ることは出来ない。研究の場における個々の矛盾の克服が単に、外的不合理として、研究の発展のためにのみなされるならば、それは難なく合理化・近代化にのみ込まれてしまうであろうし、その中で、自己の存在そのものへの痛みは意識されない。我々が、研究者としての存在を止揚しえるのは、自らの研究の＜意味＞と＜価値＞を我々の手で実現できる時である。それが可能でない限り、我々は必ずしも自らを、研究者と規定することは出来ないし、対象の個別的・即自的認識でもって、自らの研究に学問たる名を僭称することは出来ないのである。

- 以上述べた事は、我々院生が、4月以来自主研究を追求するなかで、たどたどしくたどって来た思考の過程であるが、その内容は既に言い古されたものの様に思われる。しかしながら、今まで度々言われながらも、それが研究者一般に根づいた有効な運動として展開されていないことこそ問題なのである。我々は目下、一連のユニット制解体運動を展開している。京大物理第一教室でとられているユニット制とは、助教授の独立をみとめた半講座制とも

いふべきもので、講座制の本質はそのまま表われており、研究・教育単位が小規模になったことにより、かえって閉鎖性を増し、スタッフの支配が強まる傾向を持っている。そして何よりもこのように組織単位そのものが、すでに研究者・管理者・指導者としての教官の存在規定に基づいた組織原理によって、組織されているという事の中に、研究・教育過程における一種の支配力を教官に与えている基盤が存在しているのである。研究・教育過程に一切の管理・支配は不要であるし、対話と相互批判のみで十分である。又、その組織は各研究者の主体的基盤の上に成立してこそ研究・教育は一つの自己形成の過程となりうるのである。しかしながら、この事は、批判的実践による変革主体の形成なしには空語にすぎない。我々のユニット解体運動もそのようなものとしてしか意味を持たないのである。